

報告タイトル

若き女性同志たちの悩み
—毛沢東時代に日記を書くこと書かないこと

The Struggles of Young Women in Mao's Era
----What was Written, and not Written in Their Diaries

氏名(所属)

泉谷陽子 (フェリス女学院大学)
IZUTANI yoko (Ferris University)

要旨(800字程度)

本報告は1950年代に若い女性たちによって書かれた日記をもとに、革命の論理が人びとの日常にいかに浸透したのか、周囲との人間関係にどのような変化をもたらしたのかを考察するものである。1949年の中華人民共和国の成立から1950年代半ばまでに、共産党政権はさまざまな大衆運動を発動して人びとを組織化し、それによって統治を浸透させ、社会主義体制をつくりあげていった。そのような社会の変革期に、若い女性は何を考え、どのように行動していたのだろうか。

今回筆者が利用するのは、中華人民共和国が成立したときに20歳前後だった女性たちの日記である。伝統的に社会の周縁に位置付けられてきた若い女性たちの視線で革命後の社会変容を探る。それと同時に、日記を書くことによる若い女性の主体形成にも留意し、日記を書くことが彼女たちにどのような意味をもっていたのかも考察する。また日記がしばしば中断されていることにも着目し、日記を書かないことが何を意味したのかもあわせて検討したい。

一人目のJは音楽工作団の団員として工場に派遣され、労働者たちに合唱や踊りなどを教える仕事に従事した。二人目のTは故郷の長沙で軍に所属していたが、1951年春、軍が経営する上海の工場へ異動した。日記は三反運動について詳しく記していて、政治運動の嵐が社会の基層でどのように受け止められ、どのような変化をもたらしたのかがよくわかる。三人目のCは上海の政府系の学校に所属していたが、三反運動で誣告されたことがもとで精神を病み、病気療養のため故郷に戻った。三人ともに新しい時代に期待し、革命に積極的に参加しようとするが、恋愛や結婚、人間関係などで同じような悩みに直面した。日記からは職場や家族などの親密な関係内部に政治が浸透していく様子や、革命の理想と現実との落差を読み取ることができる。